

寛永諸家譜

豊臣氏 三善氏  
良岑氏 飯高氏  
高橋氏

163

内閣文庫			
番號	和	20199	
冊數	186(163)		
函號	特	76	1



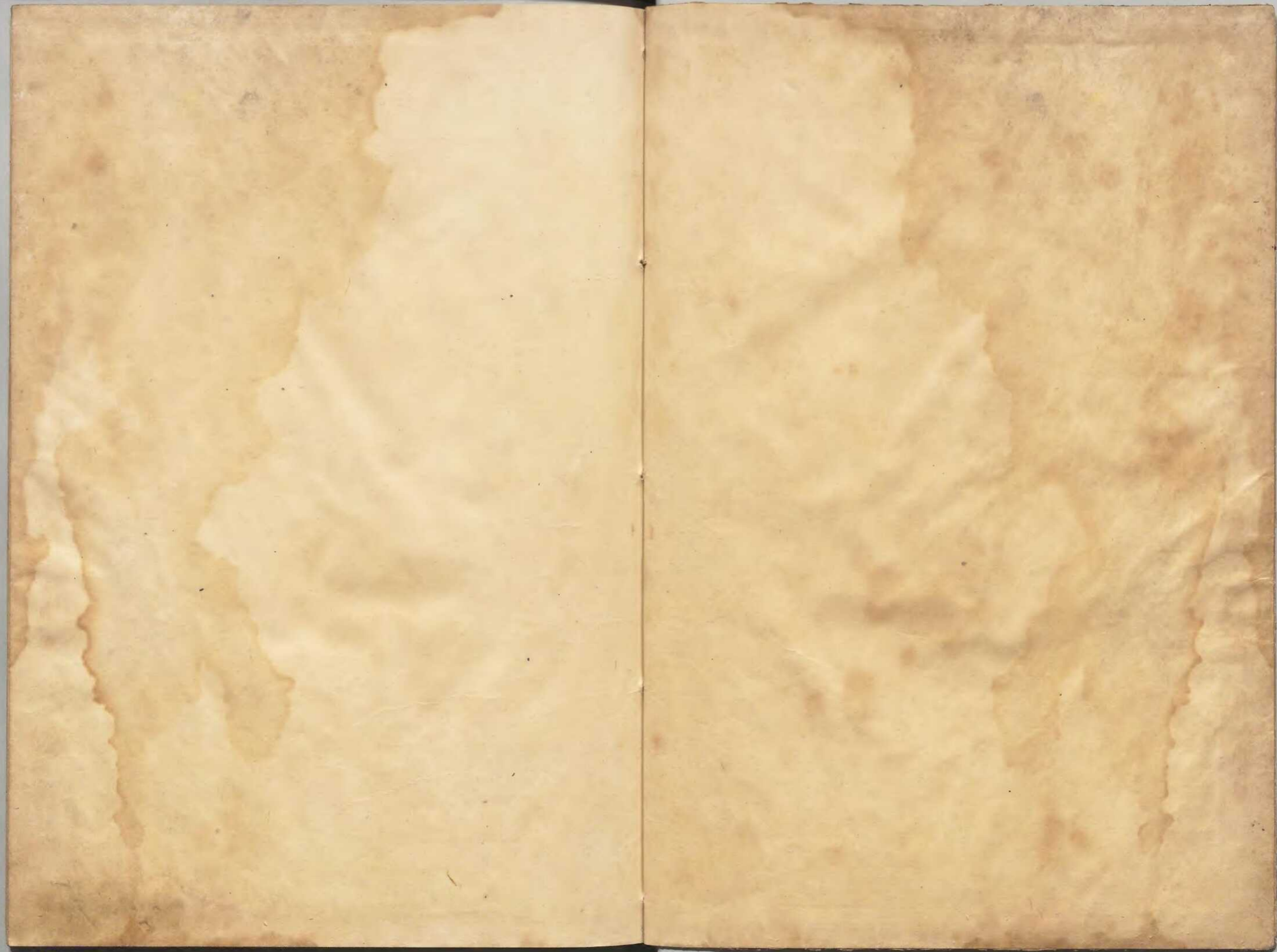
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak 2007 TM Kodak





豊后姓  
木下

三善姓

町野

良岑姓

丹羽

飯高姓

飯高

高橋姓

高橋

布施

長塩

寛永諸家系圖傳

豊后姓

木下

先祖為平姓松原氏なり

淺草文庫

某

松原助左衛門尉

八通云々通松と号し

尾列乃人なり

同族七所兼家村家次と云ひ朝長

家定

女七曲れ女とじりり胡日城をいへく  
道相りめあもせ七曲とていへて浅井  
又た志のみのあもは七曲高層院を  
いへく養女とて秀吉の嫁と

本下肥後守

若年一少秀吉よりいへく秀吉の姓  
本下氏とていへりり後と位下は叙

肥後守一任と

大坂城に居る主君となり横列姫は  
城二万石と石と領とのり持  
後中国賀陽郡三房郡は二万石  
千石と領知とて後利幾と  
大権現乃教命よりいへりり二任法系

こねり 法名淨英

女子

政取位一位

秀吉乃正妃正妃となり侍一位叙

大権現河内國又とひく一万六千石と  
にまふ

寛永元途九月六日一薨七十  
六歳 法名湖月

勝俊

若狭少将

知少一秀吉一侍一若狭國一  
知少一

天正十六年侍一任一又少将一  
任一後洛陽東山一若狭長清子

利房

官内少輔

けりは若狭高濱乃城と一

延後

延位下い 叙い一宮くまのせう少備しうび一い 延い  
大坂冬陣おおいさかふゆじん

大権現おほいけんげん一い 供奉くわんぷと

翌年つぎとし後中ごちゆう北きた國くに賀陽かやう那な一い 延い  
二百ふたひゃく也なり千せん石いしととあり

右邊みぎへの石いし丈ぢゆう

父家ちちや定さだ大坂おおいさか乃なり爲な自みづか承り一い 延い  
一い 延い

代しろくく婚いん送さう二ふた百ひゃく也なり千せん石いしとと延いとと秀ひで法のり行ゆく  
幸さい乃なりとと延い位ゐ下げ一い 叙い一い 延い 爲な丈ぢゆう  
一い 延い

寺てら長なが也なり身み用もちケけ原はら涉せつ陣じん此こゝとと延い 爲な丈ぢゆう  
海うみ城じやうとと身みり

大権現おほいけんげん一い 延い

十月じゅうがつ細川ほそがわ越こ中ちゆう也なり忠ちゆう貞しんとと小野おの本ほん  
縫ぬい衣い助すけ福ふく地ち城じやうととせし小野おの本ほん自みづか承り一い 延い  
同どう六む年ねん加か増ぞう也なり千せん石いしととありあり 延い

豊後連足神日おの城と銘と

寛永十九年三月七日六十六歳に  
卒と

後定

信濃守 早世

秀林

合吉中納言

三歳よりして秀吉喜子となり  
伊と又小早川澄系家督とつと

抗前抗後と銘と

長二年六月秀吉に命被うけ

大軍といきりて朝鮮へ入総大将

このりて釜山浦に居り部将といひ

つりて合羅道右清道而く城跡と

せめやゆり豊年三月攻陣と

日也年開ヶ原合戦れとき

大権現より志さるる軍切

ありあり沖威状とるりて抗

某

筑後と持して備前兵衛と銘と  
十九歳

日八年後およそひく堯と二十歳

お雲守

後治

左兵衛

寛永十九年五月九日お督とつぎ

延次

二万石子不とふりね

縫殿助

寛永十九年五月九日お子不とふりね

女子

松平大膳亮忠重書

利南

淡路守



十一歳少く後府より

大指現より湯見より

より

台徳院殿より

より位下より叙より

寛永十八年 命

仁和寺沖建立乃

利次

左進 生國山城

幼少より高登院養子

寛永元年高登院酒井

土井大炊

より

台徳院殿より

状今より

元和元年京都より

台徳院殿より

將軍家より湯見より

翌年二月江戸へ参勤上

寛永三年江戸野河栗右衛門

了とひくはれ三千石とにせり

日十一年

將軍家沖上洛此信也

家乃紋 澤澤胡馬

三善しんぜん  
町野まちの

●  
康信やしのぶ

三善太史属しんぜんたしりやく

京都きょうとよりありて頼朝よりともより忠ちかなりけり  
八道はちだうよりく吾信ごしんと号なづけり  
同所どうじよより  
後のち宿しゆく老らうより列りやくよりくくりし

康後

康信長子と町野民部定と極と  
兼久二年使節とが少く上洛  
加賀ちりつと  
貞永年中式目と撰一超清文連署  
十一人乃内り少

倫重

三善大和守

式目連署十一人乃内り少

倫忠

三善兵庫允

康持

三善 散位

康連

三善民部大進

康政

三吾 後 康宗と改  
<sub>いひこ</sub> 十代系譜の絶を志す  
<sub>いひこ</sub> 康後の子孫法圓よりおそまを  
皆町野と号す

某

伊豆守 河川蒲生郡日野より

秀長

備前守

天三十二年八月十九日歳七十七あり  
逝去 法名浄珠

繁仍

友近

天長十八年十一月廿六日歳七十一あり

道吉 法如寺

幸和

長門守

天三十八年秀吉小糸氏攻氏直乃  
小田原城とせありし時幸和蒲生  
飛騨守氏卿又屬一方と後も少  
柵とゆい堀と堀とけり 是仕家と  
なす法年又制 仕家此外一人

おろしととく少也月下旬氏卿自志賀  
与三太夫大塚七兵衛綿利八右衛門  
りしは城中心根とすゆい見り  
見のまのたも成まりて百余騎と發  
一是をふ氏卿藤藪乃前此並  
登て坂なりものしは幸和仕家  
場しはとくもとす純本氏卿乃  
右に眼し飛と志賀ハまくとた乃眼  
居と周知し我人と年と氏卿

此と馬の一人を捕きたると歌これ  
りしるく引是を後蒲生左門曰  
也席兵束佃又左木門是并吾志束門為純  
来り幸和の席垣首一級と捕又蒲生為  
同敷内が部江英濃口文彦為と生捕  
仕家場一磔と  
七月小田原城没落と曰下旬秀吉會  
津一入奥列とたつて會津十七郡  
并西仙道也郡と氏御一たはり

笠井大崎と本村伊勢守一とありく  
秀吉九月一上河内也  
同十月下旬伊勢守分國賊蜂起と  
廿七日死腕と此く氏御一若氏郷  
政宗一援兵とあり十一月三日會津と  
初同十六日圍分一兵陣と政宗は  
六里先前聖黒川よる同十七日氏郷  
政宗陣下黒川一社軍乃評定系  
是の事黒川を政宗分よとて會津

より六十余里あり日十八日氏郷新地  
此大勝表し一か後と認みげり  
色摩中野田城と焼て引退政宗ハ  
中野田より傳知氏郷を色摩北を過  
不傳知氏の政宗使志と氏郷ハ  
行つて一織り病氣篤明日此傳  
相違らねるべきと若氏郷是  
と一歩一日相違り同日伊勢守切腹し  
及も一永武名と失る一人ありと

以上と同日か後と包きの一使志  
より十九日此曉天又色摩と大宮  
ゆり路勝一三里あり少ゆき石生城  
有先きの兵知しして約城中一少  
横合し一か野里法炮と敵つ當生海軍  
日忠を奉り日軍の若菜并又幸和口人  
後とすも石割し中せめしせ外新と  
破三方より本丸此城際より一附入  
け時深處より法炮し一あり忠を奉り



搦子ぬ着幸和并又守即兼是は大小あ  
攻入まふもろ本丸一系入木の時城  
中の款七八回突か後よ山本戸あり  
氏卿并志賀と志賀と推入志賀派  
と為り幸和郎佐治と入款と本丸の  
内より進出幸和一属一討死とある  
町野新台場田村理安保基忠郎等  
なり即時一城没落一有千余級  
と討死翌日伊勢守が佐治の城一白

佐治城と名を國賊赤名生城に落つ  
志賀守と己一伊勢守又赤名生  
城一あり

十二月四日蒲生忠たあつと一城に  
神と伺見せしむ同日氏卿巡見れあ  
僅一數百騎と率城乃を西と包城中  
一少小塊なりと見共と一志賀と進  
これより一方は山嶺一一方

江田あり蒲生に師を未并り幸和と  
もいへば後法こと七八町が同列退を  
本村佐珠ちが共まゝ踏あり歌と我ふ  
承りもき坂あり人馬は道  
てしらけり歌あ道とみく急  
追討方高む地とあせ歌と辨これ  
こそ鉄炮幸和がたれのみわう歌  
同十九年七月南郡が長尾九幼修理亮  
三寶函藏と借し蜂起し奥列

大い乱る秀吉警し秀次とて  
大将となしし秀次教百れ共と教  
會は陣に

大権現開東に共と教し岩は  
陣にふふ氏郷ととく先鋒の  
也大将とと秀はしと地尾帯の在情  
と

大権現しと井伊と部少捕直政とは  
これ浅野深云少彌長政とをいへ

身約と志く八月一日氏卿が張とて  
路れ傍へ根雪村城を蒲生源兵衛が射  
日志志志つ射陽時へせめ落し  
穴田井れ城郭へ開長門守田丸中督の勝  
力大將なり同七日九部表へ教令  
幸和弁へ蒲生源兵衛と志く先  
城中大軍乃火と志く  
か大へ戦ふ氏卿直政堀尾の兵と戦

碎き敵と城中へ進入有敵百級と斬  
寄手城際へ陣江曉天へ攻入んと志  
其教九部長政へ陣へ走來河と志  
陣謝志く陣へ乞長政功れ速く  
戦況物と志く九部へ命と杖南部  
狐と志く先へ福送分城中  
此凶賊南部へ陣集は侍事と志  
堀尾の城と志く堀尾氏卿直政  
堀尾の兵一方と用雜兵と志

秀く成り入西賊南部の降る事  
と警一方より之崩之將の兵出さ  
追西賊れお三十余人のみ外有二十  
余級とらに成ハ長政是とけ五  
秀次とび

大権現 一 信を以て秀吉氏卿と會津  
又封し 一 時 一 豊仍幸和父子に  
井繩代城とたまふ 一 後二本松又博  
秀次及乃と會津とけら道守幼

十八万石と幸由ふおのら此幸和真駕  
一 居  
開ヶ原一戦乃ら

大権現 一 會津六十万石と忠卿  
たふふこれこき幸和白川城を領  
氏卿薨 一 秀次嗣秀次卒志  
忠卿嗣忠卿嗣子く 一 困  
あをらりこれこき幸和流落  
江戸より来り

寛永九年八月廿二日

將軍家よりしりかされ

同十年六月十六日足將同心又十人

あづきり多し同十七日甲列よりひく

此迄也千石とたまふ

同年十二月廿八日布衣と忌とる事

とゆりて

同十五年十月十二日与力同心十騎

あづきり多し

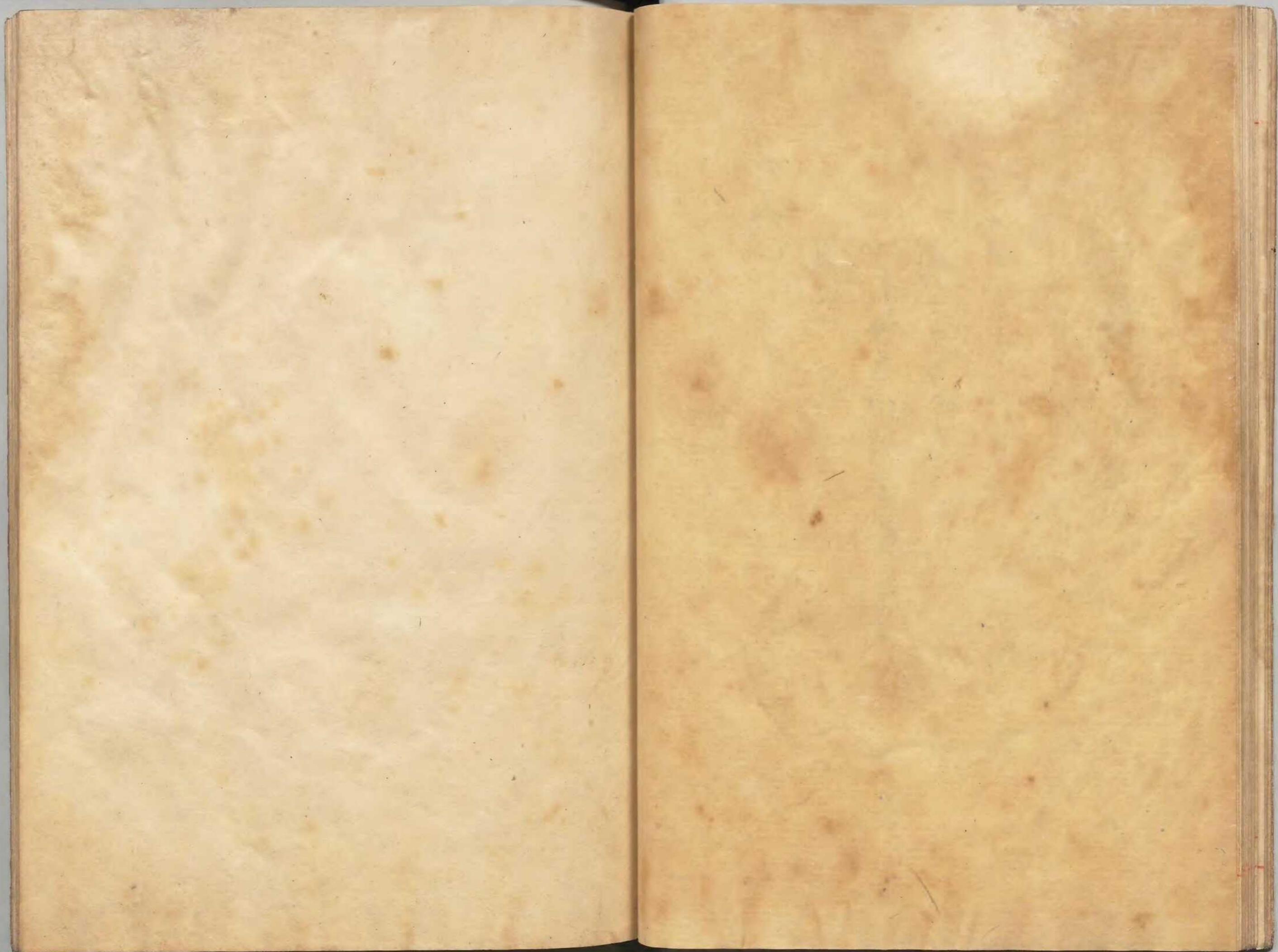
幸長

たぬ

實ハ砂敷作渡守利家の子なり幸和

養子とす

家の紋 九曜星



三善

布施

淨翁者亦二人此子あり八坂塔乃也

少き者より事と初らんとある者所

れいしくいしく借統よりゆり法カ

甚なり先鴨河乃水と初て運流せ六

塔もまゝと西とあり即二子代傍小

西くさ道に成いなり初水はらゆら

運流とあきくしるるく又塔れり  
ふけりといのりく是誠西と云二子  
一人布施氏一人飯尾あり

長吉

孫藤の射 生回巻行

大権現くしるくくくくくくく 法名蓮忠

長吉

孫藤の 生回日か

大権現くくく

台徳院殿くしるくくくくく

元和八年九月よみと歳七十 法名

宗文

吉成

草葉 生回相模

將軍家くしるくくくくくく



寛永十五年八月廿二日  
法名宗蓮

吉時

与生 生四日

寛永九年八月廿二日

將軍家

吉成

龜之助 生四武

將軍家

家乃致 井筒中



● 康貞

布施

冬河守 生國大和

小糸家より清之世、國府とあがり

小糸氏康より清之世、相列大

任の那武列編毛れ

元禄二年八月廿五日小田原より

法名志境院普全

康則

彈正右衛門 生國同前

永祿七年總列治の巻合戦の時

合戦の時あり氏康おもしろく感歎

作渡守よりつても因又康貞あつる所此

團扇に後とほしとめし相列れ内大臣

半郡板戸村大槻村よりび夏列小坂村

武列若付領此同善能寺指毛此同野

川村等と領を

天正十三年十二月二日小田原よりし

法名洞中院芳沃

貞次

善以亭 生國相模

氏政より治之入夏列小坂村と領を

文祿三年九月廿九日小田原よりし

病死歳二十五 法名法鏡院長栄

三後

善六郎 六右衛門 生國向あ

氏政より清乃字と給ふ

天正十八年氏政生客の時おたり

を時と名のら氏政より志とひく

高野山より印り氏政逝去れ後墨壁

江宮おれ給

大権現より言ととけ放り 明徳が志誠と

感下給ひりかされ善清並幼と

けり

云重

善六郎 六右衛門

寛永六年

將軍家より給へり

家<sup>の</sup>紋

あ<sup>げ</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>系</sup>

● 勝重

布施

藤兵衛

生田巻河

廣忠彌

大権現

天正十二年長久寺陣

長十二年の死

法名寛禪

正森

乙未 生国日記

大権現ノシテノノノノノノノノノノ

天正十八年 小田原古陣ノシテ

系長也年 開ケ原陣ノシテ

ノノノノノノノノ

大坂古陣ノシテ

台徳院殿ノシテ

將軍家ノシテ

寛永七年ノシテ 歳六十四 法名宗英

云重

友右衛門 生国日記

台徳院殿ノシテ

系長也年 開ケ原陣ノシテ

大坂古陣ノシテ 時休見乃賊妻ノシテ

ノ



將軍家よりけしむるをきくまのり

正重

入来

生田武彦

寛永十一年より沖田成つとむ

家乃改こゝろ丸の内まるのち遠藤とよとう徳とく

布施

吉次

孫右衛門

生園冬行

大権現

三列一向宗一撥乃時渡多志右衛門

とありせ討死

重次

新江部 孫素 生回回

大権現より

長五年開ヶ原陣

翌年より同心十騎とわづあら

同十二年後列

九十四

重直

新江部 孫素 生回武秀

長十二年父が家督と

同心とわづあら

元和二年

大権現薨逝乃後

台徳院殿より

同心二十人

同年十二月布衣と忌より申と  
ゆふはのら

將軍家よりはくへく〜

重成 ちやうせい

新正廊

寛永十二年十一月廿七日始〜

將軍家より湯〜

重勝 ちやうせつ

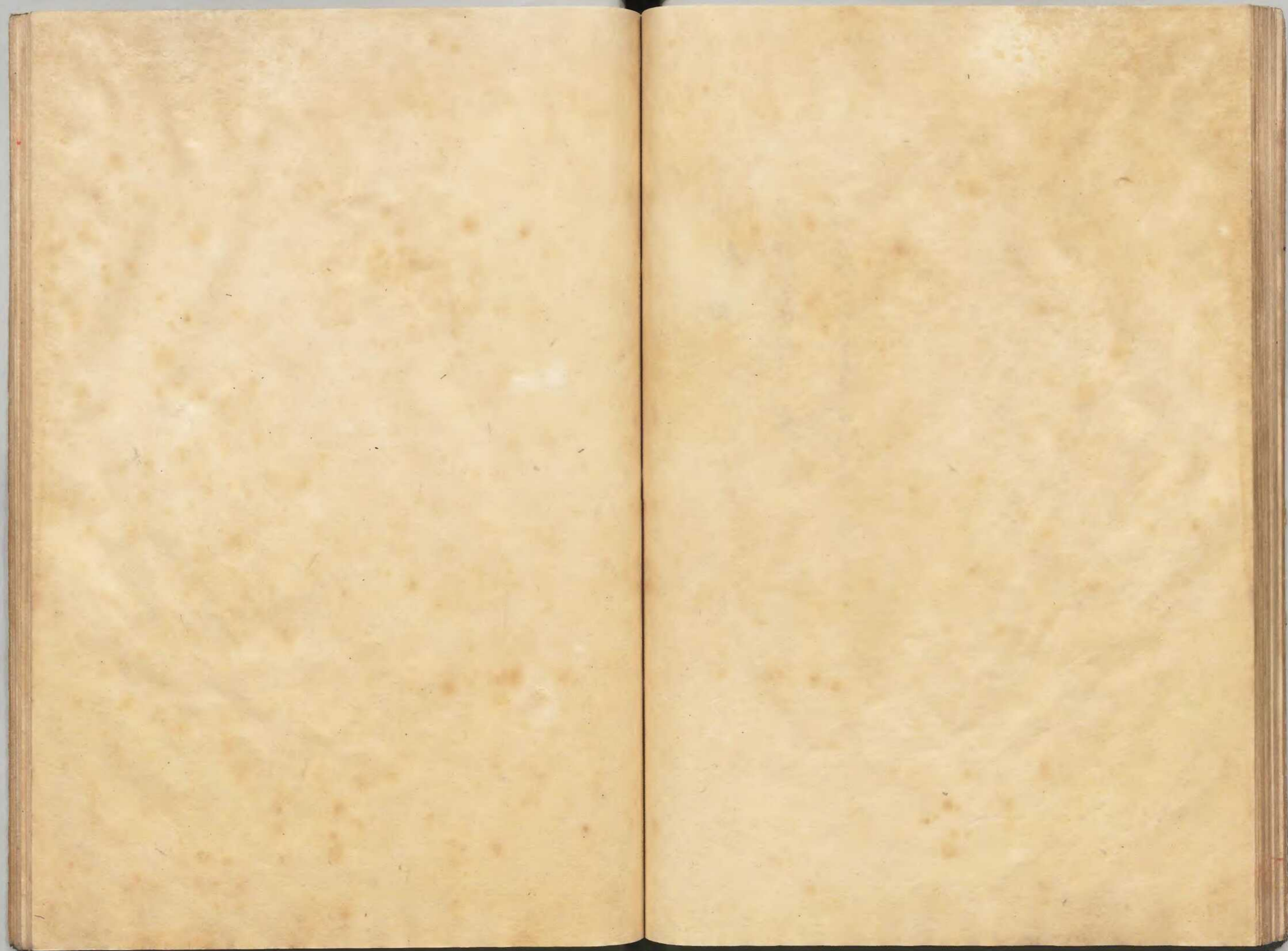
新助 しんすけ

寛永十八年六月朔日始〜

將軍家より湯〜

幕乃紋

角れ内〜  
符押 たうりし



良岑姓

姓尸録

延暦二十一年十二月廿七日特良岑朝臣

安世

桓武天皇乃御子なり

七位下百濟此岩祿之継女御なり

みやけ

延暦二十一年十二月廿七日特良岑

朝臣此姓とあり

丹羽

安世

ヤシヨ

三二位 大納言

桓武乃朝 治久 政務

少将

宗貞

シヨシ

少将

仁明天皇 治久 帝崩 治久

深草 里又 藤内 宗貞 侍母 治久

葬所 治久 治久 治久 治久

治久 治久 治久 治久 治久

族 治久 治久 治久 治久 治久

修 治久 治久 治久 治久 治久

天皇 治久 治久 治久 治久 治久

治久 治久 治久 治久 治久

素性 そせい

玄理 げんり

故 こ ありく 尾 び 列 りゅう 丹 に 羽 は 群 ぐん 配 はい せらる  
姓 せい と 掠 りゃく 橋 きょう 改 かい 丹 に 羽 は 之 これ 稱 しょう と 是 これ 丹 に 羽 は 元 げん 能 のう なる

恒則 こうじつ

掠橋 りゃくきょう

羨逆 せんぎやく

掠橋 りゃくきょう

於利 おりの

掠橋 りゃくきょう



惟恒 えんご

日下徳久 にっかたけひさ

惟光 えいこう

本姓良岑 ほんせいりやうしん 久 ひさ 散位 さんい 恒 えん 位 い 下 か

惟季 えいせい

散位 さんい 恒 えん 位 い 下 か

長季 ちやうせい

成海 なりうみ 太史 たうし と号 とごう 氏 し

信龍 のぶりゆう 遠 えん

信宣 のぶのぶ 仁 に

希力 きりき 禪師 ぜんじ と号 とごう 氏 し

利景 りけい

長塩源ながしほ以もと号なと号なと号な是これ長塩ながしほ乃なり祖そ也なり

景高 けいこう

源流げんりゅう

高继 たかつぐ

市三郎いちざぶろうと号なと

三明 さんめい

大色おほいろ一ひとりひと已い下げ家か譜ふ乃なり絶たつ  
長塩ながしほ後ご一ひと細こ門かど氏うぢ日ひ一ひと之の口くち人ひと此こゝ家か老らう  
と号な

丹羽にひ助すけ太た史し 生なま國くに尾お張はり  
信のぶ長なが 一ひと 信のぶ

左平太 生國回あ

織田城つとむ分わかりししるる信しん列りやうをを乃の城じやう

没ぼつ落らくれれここささ首しゆ級きゆうとと得とくららをを城じやう

信しん雄ゆう一いつしし之の長なが久くのの合あ戦せんのの時とき歌うたと

但た討う一いつ首しゆとと死しままとと秀ひで吉よし及ひ秀ひで以も

秀ひで頼より一いつ了りやう

えわえの

大指現おほさしげん一いつ湯ゆ一いつくくららのの湯ゆ

台徳院たいとくゐん殿でんとといいひ

将軍家しやうぐんけ一いつはは之のををくくららのの湯ゆ

寛永十二年十月の事と歳七十一

平太兼へいただかね 生國山城なまくにやまじやう

元和二年

台徳院殿たいとくゐんでん一いつ湯ゆ一いつくくららのの湯ゆ

同九年

將軍家

長 垣

尾列丹羽氏乃別なり明徳年中  
又長垣名傳入即家次と云者あり  
て麻苑陰義満一ははふいふと共  
裔一うこしはむびくたすとい  
せと美く一とく一て後劫とい



將軍家ノ紋

三直

左系

生國同系

將軍家ノ紋

家ノ紋  
檜府

飯高姓

飯高

飯高姓ハ姓名録あり載之

少色いし先祖れあり取次知

家譜も又紛失を故り志

家傳の流しを

今按て終り子孫の流し飯高

あり阿比平氏なりと



家傳のく飯高れ姓と日と  
三代實派の載と位と飯高  
朝臣承雄丹波守とあり  
朝臣承高とあり  
とく後此人れとていと教と

白水

今河義えとてとてとてと

流落とてとてとてと

大権現開東迄入ふれとてとてと

武列多麻郡下仙河村とてとてと

後城廢破頂れ奉納とてとてと

陣おととてとてとてと

又とてとてと

慶長十七年六月十九日と病死歳

八十

貞次

孫入系

生國後河

貞以十七歲此時

大権現

湯見

...

肥列

名護屋陣

...

大坂支度

西陣

...

大権現薨御

台座後殿

元和七年大坂

...

...

寛永十一年八月十二日

病死

歳六十四

貞成

長系

孫入系

生國武統

元和四年

台座後殿

湯見

...



貞久

日十八年 大久保主膳正 継子 一  
て大出番 一 (終り)

三田郎

孫 大坂 一 (終り)

某

檀之助

生四武藏

某

檀三郎

生四同家

家乃紋 三亀甲



高橋姓

高橋

今按いまあはとらら麻苑院まゑんいん義満よしまん乃の也なり

高橋たかばし式部しきぶ悉しつ光秀みつひでとといふいふものものあり

大宅おほやけ氏うぢなりなり姓なづな尸録しりくとといふいふものものあり

者もの敏達ひだた乃の皇子みまろ難波なんば親王おんみこれこれののら

かりかり同どう高橋たかばしハハ信朝のぶあさ臣おみこれこれ同どう池大掾いけおほのすけ

具もつ今いま乃の按あはなりなり景行けいこう天皇てんわう東あづま玉たま



家の故は

創り菱は



